伝花第壱年

徒然草諺解巻三

五月五日かも（競馬）のくらべ馬

昔内裏の豊楽院（ブラクヰン）にて騎射（ウマユミ）あり左近の馬場のまき手（ガキ）番（ツガ）ナドゝ云事根源（ネモト）ありて五月五日の節（セチ）に五位以上進（スヽ）ミ走馬（ハシリウマ）上（カミ）云（イヘ）ル延喜式等（ナド）にあり然（シカ）るに中比（ナカコロ）より此事（コノコト）絶（タエ）て今（イマ）は加茂（カモ）にのみ此（コノ）儀式（ギシキ）残（ノコ）りり

各（オノ〳〵）車（クルマ）より下（オリ）てらち（埒）もとまりたるに。

こゝろこゝろに（ヲノ〳〵）入（イリ）ぬべき（ハズ）もの（ノ）ひきあはせ（ヒキアハセ）もちたる（モチタル）あり（アリ）。もの（ノ）木（キ）（梅檀（センダン）の木（キ）ともいふ）にこいをぬりて（ヌリテ）油（アブラ）をふきあたゝめ（フキアタヽメ）たりとて。ものゝ（ノノ）ふたりて。ものゝ（ノノ）ふたりて。ものゝ（ノノ）ふたり

あやうき杖のうへにて。やをきんありて。
らんとおもふ。我(兼好)
生死の到来(タウラ)。
(死人ニヨノ生ノ守ニハ心ナシ)
ただ今とも。
をといひもれぬおなる人ども。
先をそこなふといひて。
いふせにて。(我他人ハ土ヲ見テ
のこり雅(タル)
ひとりざんもれず。(見物ノ人ノ)
よあらじ。

(サテニコソアリ)
(カル物見ノ場ノインガハヒ新ニ)
(ボノ世キ)
(カン)
(ボウ)

あるに。支選鼯眠(詩ニ云人非木石豈無感)
雅清(地村上源氏ノ)
鏡イフトモクモヒリ誠ニ俄ニ教フレバ自得ノ恩感ヒ動クハ必然ノ理ナリ
髙橋中将(ザウ)と云人のまだ(ガ)雅僧(ゾウ)ざりて。教相の
(教相)(真言家ニ聖教ヲ学フヲ教相ト云ヲ行ヒヲスルヲ事相ト云フ爰ハ事相教相ヲ兼ル人ノ師ト云ホドノ僧ヲイフリ)
ふるに。鼻(ビ)の中(チウ)
くつろひられと。ほのやうにて。
もられて。(目眉ヲ見ヘ分ヌ)
(瞳)
(三の森)(今ハ森ニ安摩ト云テ初ニ来ルリア其次ニ色赤クシテフクラニキ面ヲアツルナリ)
うづたかくして。鬼(キ)のかた
につき。額のうどんこのやうに

九人にもみ〳〵。年久しくもありて。行
ひづゝりくるうてもすまひもある
事つゝそ。ありける

此段世間ニ病ニ依テ其人ノ善悪ヲ定ムルコト戒ムル元病ニハ変症アリテ甘ツ〳〵ノ奇病甚ノ劇多シ何ノ悪人ノミアラキ病ヲ受ケヤ気質ヲ棄ル処モ情ノ感スル所ニ依テ病ヲナサヾル善人病ノ甚キ事数ヲ尽シハ孔子ノ伯牛カ病ル時命ヲ哉トノ玉ヒシ所ヲ以テ此ノ段ヲ工夫スベシ世ノ医ヲサトサン為ニ教訓ノ師ヲ且僧ト云出メカシル病モアリケルカトモ留ム

春秋

喜れ〳〵つゝ。ゐどもやう
らぬ家のむくふく未ざりの
まてゐる花見うかれをさそ
ひ入てこれど。南面のつゝ
子ーなむろてまひーあ
のきりにあきさま。御簾のやぶれよりなまば

艶ハミヤビヤカトヨメリ優艶ナル天色衆ナリ

靖

かうちきよげなる男ゐ。どら
あれどんよくのどやうにひろげてえゐうちいとうち

此段末ノ段ナドハ古詩ノ体ヲ移テ優ナル艶ナル書クサヘ此ノ男ノ体。人舞ヒ所ニ居メモノドヤカニ書ヲ見タルヨラ褒美ノ国門ノ中ニ所スルトテモ猶心ヅカヒ有ベキヨラ教ユ

きうまり

此段末ノ段ナドハ古詩ノ体ヲ移テ優ナル艶ナル書クサヘ此ノ男ノ体。人舞ヒ所ニ居メモノドヤカニ書ヲ見タルヨラ褒美ノ国門ノ中ニ所スルトテモ猶心ヅカヒ有ベキヨラ教ユ

ありーけ物のあと戸れうち
よるもあひさゞうるう豚ど。
ーあきいとゆーべまてるさ風うそ。
ひうりをもうて。もるうる田れるる大ものそもちを。
編ばかれ。ありど。

吹すさびたる。表とまうすべき人もあらじと思ふ。ゆふつかた兼好のもとへそこそこ行侍と
とぶらひきこえて。山のまろにおもむきて門のあるもとへ入ぬ。
檜垣「車ニ乗ル元物ナリ」うるはしき車共あまた立ならべたり。
しておほくの人ぞ集ひたる。いまだ法師にもなりたまはぬ。
ども。さうぞくの風よさうそくれんなる。客人
拙き句ひねもすにしつゝ寝殿よりは堂へ廊
通路女房共。追風「ネノ意物ナリ」用意
ぞ。人めをもき山里もいと
ぬ。つゞひきたり。是ヨリ其ヲ受ル景気ニ乱ヲ云
よりは雲にこもれる秋の野辺か。

ともさわがしき霧にうづもれて。もの
やりうち出。都の空よりは雲の往来も
なやさんもちゐて。風流の捨がたく
公世「閑院ノ末流。八条ノ相国宣行ノ系統
二位侍従公世ナリ」
ざうりと「兄ノ下ヲ云」
あしまうかうり。娘のそ
それへ。人招ずとの後ろめたきこゝちして脇
後ろとやそへ。いかゞとうちあて
はまをまうまにて。大きなる榎の木陰
傍らといひそうな。いよ〳〵そゝりて
てすりそれが主招ずとて婿迎

偽ものとぞいひける。此段腹悪キ上ニヲノ全編ニ云ヒ立タリ自ラ偽ノ職ハ何ゾ外ヨリ唱ル名ヲ忌ニ此僧心極木ノ僧正ト云フヲヲ忌テ切ラレシヨリ次ノ人ヲ戒ム

柳系ものよ強盗法師と号する偽ものなりけるとぞ

先段ハ又名ヲ呼ル人ヲ教ヘ此段ハ又又名ノ子細ヲ聞テ其人ノ実否ヲ可定教ニ

或人清水へまゐりけるよ。洛陽ノ東音羽山清水寺也宝亀十年初テ建立ス

乞すがらんといひければ。

事をとくへ。

やまざりけると。

嬢ノ字諸ノ字ノ通ハス行連久ノ辨

嬢ノ字ハ女ノ児ノ小ナルヲタルトキニ又此方ヨリ乞ヒ求メ〳〵上云テ二ツヲ共ニ言アヒ乳母ナドニヨセラルヽ

漸ノ字ヨリ〳〵ト返ヘスヘシ

禁令ノ字日本紀ニモ上ヨリ又来記ニ厥常ノ如ク

ふくとよせべ。

此段ハ世ノ君臣ノ間尤偽リ多ク面ニテハ従ヒ従テ退テハ君ヲ者ナシ如此片時モ児ノヲヲシカラン志ハヲロカナガラ殊勝ノ事ナリ

光親

按察使權中納言四位男堀川ノ中納言ト法名西親承久七年於駿河國被誅

ふしぎなりけり。

是ヨリ兼好判ノ

ふしぎなりけり。

院ノ

女房あるまでれ維よれ

黒心日本紀

晩嘆ノ声ト注リ

乃中ニ入て

院ノ

ともあれかれ有難のものなりけりと。

衛門ノ督ニモ統重モ

食物ヲ

供ぜをもさゝれて。

前ニ曲ノ

勝縁ありてまゐりけるを

院ノ

あやしめられて。

光親

ふしぎなりけり。

愛ノ心ハ光親今日右ノ奉行ナレハ其コヲ大事トシテツイガサテヲ指入テ急キヲ心ヤリ又可捨ニモアラズ先ツサシ當レル役ヲ務ルヲ有職ナリト感ゼサセ玉フナリ必ズ御落膝ニ迄ハ非ズ

老[オイ]衰[スイ]ノ來[キタ]リテ始テ道ヲ行ゼンヨリハ人命ハ不定ナレバ

[然ニハ必ズ老テ死スルニハ非ズ]

[丙ノ思ヒカケヌ処ニ]

[ガ]

ナホ[ホ]ヘニ[ニ]これが年ノ人ナリ。[サウ]

ヨ[ヨ]ノ世ヲ[ヲ]ソムケ[ケ]ルヨ[ヨ]ソホ[ホ]ヒ[ヒ]ナ[ナ]ドスルハヨ[ヨ]ソホ[ホ]ヒ[ヒ]ナ[ナ]ドスルハ

やまれるやまひ[ヒ]ハ[ハ]ヨ[ヨ]ノ[ノ]常[ツネ]ニ[ニ]ハ[ハ]ヨ[ヨ]ノ[ノ]常[ツネ]ニ[ニ]ハ[ハ]

[後世ヲ[ヲ]ネガフ[フ]ヲ菩提心ト[ト]ス[ス]リ]

[吾益ノ世間ノイトナミ]

ラ[ラ]ブ[ブ]ベ[ベ]キ[キ]ニ[ニ]ハ[ハ]ア[ア]ラ[ラ]ズ[ズ]。[ソ]ノ[ノ]ク[ク]ヲ[ヲ]ヒ[ヒ]ソ[ソ]ギ[ギ]

[跳ク世ヲ去ントスル時]

てつとめ[メ]ヲ[ヲ]ソ[ソ]コ[コ]ナ[ナ]ヒ[ヒ]テ[テ]ソ[ソ]ノ[ノ]ヨ[ヨ]ヲ[ヲ]ソ[ソ]ムケ[ケ]ル[ル]ヨ[ヨ]ソ[ソ]ホ[ホ]ヒ[ヒ]ナ[ナ]ドスルハ[ハ]

[後悔メモ]

ヨ[ヨ]ソ[ソ]ホ[ホ]ヒ[ヒ]ナ[ナ]ドスルハ[ハ]ヨ[ヨ]ソ[ソ]ホ[ホ]ヒ[ヒ]ナ[ナ]ドスルハ[ハ]ヨ[ヨ]ソ[ソ]ホ[ホ]ヒ[ヒ]ナ[ナ]ドスルハ[ハ]ヨ[ヨ]ソ[ソ]ホ[ホ]ヒ[ヒ]ナ[ナ]ドスルハ[ハ]

[追ヒ[ヒ]ヤ[ヤ]ル人モ無常ヲ[ヲ]足下ニ有ト心得ヘシ]

堂[ダウ]ノ[ノ]ア[ア]ル[ル]ヤ[ヤ]ウ[ウ]ニ[ニ]ヨ[ヨ]ソ[ソ]ホ[ホ]ヒ[ヒ]ナ[ナ]ドスルハ[ハ]ヨ[ヨ]ソ[ソ]ホ[ホ]ヒ[ヒ]ナ[ナ]ドスルハ[ハ]ヨ[ヨ]ソ[ソ]ホ[ホ]ヒ[ヒ]ナ[ナ]ドスルハ[ハ]ヨ[ヨ]ソ[ソ]ホ[ホ]ヒ[ヒ]ナ[ナ]ドスルハ[ハ]

[必至ト[ト]ヒ[ヒ]ト[ト]ヲ[ヲ]ソ[ソ

ありなり。されどそもそもるべて二三日。人のうつゝ事なるべ
きをそ。その鬼ぬ実ごとをもあらざりといふ人も侍るべし。
此段世間に毎々氏ノ偽リヲ云出スヲ必ス信ニ謀カセザルヤウニト教ヘ又末ノ段ニ三日癈ト云ヘルハ凡ノ人ノ気
ハ本天地ノ気ヨリ故ニ常ニ替ル事曲アルヲ淫言ト云ヒ草木鳥獣モ天地ノ変
気ヨリ妖孽ト顕ハル是皆理ノ自然ナリ然ハ実ハナシ上云ヘル所モ実ハナシ上云ヘル所モ皆ナシ
言妖淫テアルヲモ記ス

亀山ぬの池よ。大井川の
（八十九代ノ後嵯峨亀山ノ離宮ヲ立テラレ隠居ノ御所ト今ノ
大井ぬ土民よ作てる車
（魏ノ馬鈞初テ作ル
くせあしと引て。救日ぬ
（火ノメグリソラニ故ニ大カタト出
きるよ。大うめぐりぬ
（引日本紀ニアリ引用ルノ義ニテ
り雨ぬでいるぞうぎ

をめしてごらんぜられんがやうにおぼしめしけるが。（おぼしめしけるが）
（おの大形メグラス上云ニ對ス）
いらせられけるが。（いらせられけるが）
いろことめでたう申。（是ヨリ判メ）
（出段美事ニ甚ノ道ヲ知ル人ヲ可用コヲ云ヘリ）
のいやんとおきものなり。
（寛平法皇ノ御巻室ヨリ故御室ト号ス）
仁和寺ある法師。年よるまで石清水をたゞ
（男山八幡宮ヨリ）
（在ノ字或ノ字ノ誤）
ざりければ心うくたうじて。或時思ひたちてひとり
（歩徒ニ又徒ノ字ヤモ書ク）
もよりまでゞり極樂寺
（八幡宮護國寺ノ別當安宗開山
ヨリ右ノ安宗ハ行教ノ弟子ヨリ
玉垂命ト申也一説武内神ト
右極樂寺。高良。共ニ筑後ニアリ）
（是ヤハリ心得違）
高良へ。
（ヒトリ詣ト云フ事ヲ）
まうでのぼりけるを。
（ヒトリ詣ト云フ事ヲ）
さうなくこえそたがりて。
（侍）
さそうにの人もあひて。
ごとに山へのぼりけり。
（ヒトリ詣ト云フ事ヲ）
ゆきぬ。まてしにも
（ヒトリ詣ト云フ事ヲ）
かど。神へまうでそいひまうでゞとぞいひまうでゞ
（カミ）
（本意）
（ヒトリ詣ト云フ事ヲ）
ゐまうでしたりけるこそおろかなれ。
（ヒトリ詣ト云フ事ヲ）
（武勝モ前ヲ兼テ我意ニ仕スト云フヲ述フ）
（必ス過チアルヲ云フ）
（ヒトリ詣ト云フ事ヲ）
（ヒトリ詣ト云フ事ヲ）
（ヒトリ詣ト云フ事ヲ

志ばしゐ(萎)みでく海(千)ぬうんとするに。大方(ほた)ぬれぞ。酒宴(しゆえん)
ときめて。いぐはせんとまどひけり。うくすれば。
くびのまはりをきて。血(ち)いまもつまりぐれば。「暴ノ」れ
「爽ノ」ぞ。ひぐきて「堪忍ナリ難シ」へぐるはのくうへぐひをうち
やうなくて。こあなる時(とき)うをきて。血をひき杖(ぢやう)をつきせて。家(いへ)
「許ノ」まで。おてあゆきる。左右(とかく)ぐうぐうぐる。醫師(くすし)のあやまりと
うぐりるー。醫師「見ヨリ兼好推ス」のとりさーいりて。もひ
めぐうぐんありさる。さてそこ異(こと)なりぐあ。祖(おや)

をいつもぐりー。ぐよひぐまでなぐべ。ぐふ
とハ文(ふみ)「敵酉書ノ」にもぐんぐび。つぐへぐ。師傳
又仁私(わたくし)へ。ぬて。ぐうきるー。居(モノ)ぐるきるーめぐ。
祖(おや)よあるものいうぐうたらひ耳鼻(みみはな)をまれうす
らも。命(いのち)ぐりハるぐいきざうんだぐ力(ちから)をそそりのへ
とて。ぐれぐべをぬりにさー入(い)れて。内ノ鼻ヲ滿(ミチ)ぐ。
もちぎるりひまでるにに耳鼻(みみはな)をうぐを「缺」ぬけにぐうき命(いのち)まうけて。ひさーくをぬうり

「穿ノ穴ヲ入ルヽ」

「醫ノ幹」

「雖ノ仕官ノ途ハ異ナリ」

「暴ノ足ヲ失」

「腫」

「堪忍ナリ難シ」

「暴ノ」

「許ノ」

「雖ノ仕官ノ途ハ異ナリ」

「桃ノ夫」

「敵酉書ノ」

「師傳」

「居(モノ)」

「祖(おや)」

「内ノ鼻ヲ滿(ミチ)」

「穿ノ穴ヲ入ルヽ」

「缺」

「一辛ハ辛苦ノ義ノ如シ」

「牛段アリ座真ノ過ヲ必ス失ノアルヲ記ノ左札ノ好ム者ノ戒メリ」

「好ム者ノ戒メリ」

「牛段アリ座真ノ過ヲ必ス失ノアルヲ記ノ左札ノ好ム者ノ戒メリ」

御宝(ミタカラ)といそき児(チゴ)のまいりけるを。いそぎそひおきて。あそびんとたらむ法師どもゝとらひて。風流(フリウ)の破籠(ワゴ)ども。営(イトナ)むとて。第風情(ダイフゼイ)の物に。其上(ソノウヘ)三(ミ)の役(エダ)よきやうづゝをもちて。出(イ)でんとするに。

遊仙窟ニ桃流トヲ手ヒキ

目ノ字清ト点ズ

あそびの巫　仁和寺ニアリ名ヲ知ラズ　千載集ニフリニサル年ヨカサエアニツル哉ナラビノ岡ノ杉ノ白雪

又寛平ノ哥合

色ニソヘルビノ岡ノモミヂ葉ノ秋ノ嵯峨ノユキニソミル

とゞめて。法師(ホフシ)ども。そよりうちこぼれなどいひて。うちそよめきあそびめづるに。

咬ノ字

そこそこにはれ。あれ紅葉をたん人もがな。

肋語

酒ノ間ヲ久ル義ト

花鳥ニ風ノ字ヲ加ヘタビトタル義ト

白樂カ詩ニ林間煖酒焼紅葉ノ

酒ノ間ヲ久ル義ト

とて。うちなげきたるに。

法師ヒ

そこそこにはれ。あれ紅葉をたん人もがな。

甚

とて。うちなげきたるに。

切ノ字ヲツヤ〳〵ニ云

又明ラカナル心トモ

いつもく

大和物語ニ綺羅(キラ)ヲトアリモノヽツヤナクギゴチナキヲ云ヒ又麁(アラ)モ卯ヲコトヾクシクムスフ体ナリ

うん侍(ハベ)るも。わりなくうれしなどいひて。

吾相テ

つゞけ侍るに。

埋ノ字

をうきのきてれどもやく

又明ラカナル心トモ

とくくしむをびおるどいひて。

東ノ字

あそびを人のえをまぬをあるなりけり。

間

法師どもゝとらひて。

互ニ論ヒテ

可言ヨトノクテ

判

とするとて。あまりよ真(マコト)あんなきしものなり

（此段モ前ノツキ〳〵ニアラマホシト云ト同意ニテ家作ノ心ハヨノ教タリ）

家の造りやうは。夏をむねとすべし。冬はいかなる所にも住まる。あつき比ほろ〳〵と（ヘ井）なるは。すきまの多き故なり。（深ト水ヨリ）遣水（ルナ）は。（ズ）涼しげなるこそ。（ズ）あつてもなきは。（ズ）徒然（ザウ）なり。（海ノ底物ナキ故ニ）泉なき所は。（ヘ井）冬寒く（ヘ井）。（ヘ井）（ヘ井）（ヘ井）

けて。いひおくるいとまびと（尤向ニクキナシ）
人のうり生るる前段ノ主ノ論ニ
まけまことをこそ「奇ノ三不限
らじ。そべていとも志ぬ道のおもうしるるる
ていてきてにう「奇ノ道」ト云ルヲ知ル人ハアレドモ奇ヲ知ル故ニ「奇」ト奇ヲ語ルト
道心あらべ位ふこもうし此段奇ノ道ヲ云ヒサシド文字ノ二ハ無学ノ者ハモヲ付ヌ人毎ニ云ヒ非ス奇ハ誰ニテナリトモ
ごうしじ。家こあり人うる（常ノ俗家ニ居テ妻子ヲ帯シ）
よは世うるべきうと云ハざう（世間ノ俗人毎ニ如此云ハサラニ後世ノ知ベキ
ば生死なんと思ふこと。かう（忌思ニヨテ此ノ世界ヲスカヌ者トシテ
ふ。行の奥ありてう。多く君（木生不滅ノサトリヲ開カニ上思ヲ自ヲニ
よけう人。あをとうるいさ（妻子眷属ヲ顧ルヲイサユテデットメンヤ

を縁ひうれてうるあ（先ノ我身ヲ世間ノ俗ヲ離レ諸縁ヲ放下メ
ふじぐう。（人ノ器量ヲ
是ヨリ家ノ俗テ兼ネ人
入てう。誠うをけ。嵐を（今時ノ人ノルヲ付ハ甚ノ人ヨリハルカニヲトリ
あうまねにさるれぐ。（其ノ餓寒ノ衆ニ依テ
ふうもうもうまことば（剣ノ衆生ガ悲キヲ上テ世ヲ求メバ世ヲムキヌル
てうむけうひう。さう（甲非ヌナレ
ーなどいちん。（如此ニ雅ビ
在よ入て世をいとちん人ぐ（初ヨリナニレ世ヲステタルハト
ひある人の貪欲たはきに（息ヨリ蒲好徒然トノ兩書ヲ本意ヲ
きれ衣。一鉢（世間ノ俗ヲ不離勢ル人ヘ
まうを。あう（飢うる便
走太二

う人のつい(費)へをするん。しもく(右ノ髭ハ軽ケレバ)たまねべー。邪(カタチ)よ和(ハヤ)(イカニ心バスノ足我ハ世ヲ捨テ剃髪黒衣ノ形ナレバ)
ようとくに君ようもあれ(彼ノ飢寒ノ為ニ礼ヲ求メニ来ルト云ヘドモ)ざいへとっくん
悪ヲ知リ分ル者ナレバ
まこうんちるまりて世をのがれひとへよ
あるみりて世をのがれひとへよ
(道)ざよれもむざんよろづのちくるいよ。うるわ
(畜)(鳥獣、朝ヨリ夕迄食ヲ求ル念斗リ然ルニ人ト生レテ善悪ヲ不知食ルノミナラバナリ)
あるみりて世をのがれひとへよ
(此段モ前段ノ世ヲ遁ルト云ニ次テ益ク深ク感人間一生ノ一大事ナリ)
をらびをして。さるがうらもつべきなり。(本意ヲ遂ズシテ其ニテ捨ヨ)
(果)ハてく。たるぐくばるまうこ(求ル処軽キ故早速当ラン)

(人ノ大性ノ具ノ善)

(此ノ処ニテ本文ノ世ヲ遁ルト云ニ次テ益ク深ク感)
人の(アサリ)やあるん形未雑るくさてめのまをて。(悪ニ)
(「三体詩霊徹ノ相逢テ道盡休官去ト林下何曾見二人一ト云ヘル心ニ近キ小事ナレバ大事ト云ヘル由ヲ引ケリ)
もあるへうろ。れやうくもうくかきりもうく。思ひ三日
(大体ノ)
(世間ノ事ノ尽ク)
いうくかなりて。てのつ
(「ヨリ急ニ物サハガシクナルヨシ」)
迫さんうかぬやうよるぐ。まこと(ことあり)。
(是ヨリ次ノ大ヲ設ケ由ヲ引ク故ニ)
時さんあるへうろ。一期(ゴ)
(日比本意ヲ遂ズシテ其ニテ捨ヨ)
(「三体詩霊徹ノ相逢テ道盡休官去ト林下何曾見二人一ト云ヘル心ニ近キ小事ナレバ大事ト云ヘル由ヲ引ケリ)
るる人(ヒト)ハまいりやうくさ(タカラ)
(除ノ終ニ其ノ人此事ヲ云果ス木ゴトクニ云ヘル物ノ如ク)
死(ヤ)をもうへ里ん宝(タカラ)ともれば。
(聖常来ノ命終ノ時)
人をまり抱(ステ)うん。(スミヤカ)迷(マヨ)のうまごうる死抱。ときに老うる歟。(紛雑)

ものさま。君は恩（コン）人の情（なさけ）（是迄御用ノ木綿サヘ賜（タマハ）ラズ通（トヲ）ス事ノ出来ヌヨウニ云）捨（ステ）くらして。そそくさんや
高家（コウケ）筋（スジ）より盛（モリ）取（トリ）紙（カミ）とそ（御室ニアリ七和寺ノ院家ナリ）
いもらといふ物をこゝにて
産（ウミ）ませてもだえるさまなる紙（カミ）
ものうにおもひ
幸（サイワイ）あるにや。七日二十七日（ナヌカハツカ）のうち
やうやうにいもらをえらひてこゝにたゞ
第（ダイ）九番をいやくり。人（ヒト）
とりのこゝろひける。きのふ
死（シ）うさ海（ウミ）よ。銭（ゼニ）二百貫（ニヒヤクカン）と。坂（サカ）ひろをゆうりまう

と。坂を百貫（ヒヤクカン）にうりて（カレ）
「銭（ゼニ）」あゝと定（サダメ）て。京（キヤウ）る人（ヒト）
ようよ女（メ）て。もうら（モ）
に。こと男（異）
よくり。三百貫（兼好判云）
ちゝひる誠（マコト）
ひ僧都（ソウツ）ある法師（ホウシ）
あうくり。（其旨ヲ聞（キヽ）トヨ）と八何（イカ）
家（イヘ）もちゝ
そひる。ひ修（シユ）

書。学匠。年歯人よりもそれて。宗の法燈なれと。
ちやうこもれかく思われ[真言一宗ノ一宗ノ株梁ナトニテモアル[モノアル]ヨメリ]
八暗ヲ照スニ譬ヘ喩ス
もしる曲者にて。第自由
如くいつまでも。お仕
られんおもひ[僧祇律ニ曰キ午時日影過ギテ一髪一瞬ノ即是非時]
うに。ロクに[斉]食暗[ノ]ごとにはくに時も。
それを[ヒル]もけこもりていろ[カ]大事あれな。人
のいふともきゝいるまじ。用さあ
ぬれば。いくあもいるを。

[廿四]

ふなともまいてうそのまきあ
ぬさ[ヒル]なもとも。人[不厭人ニキラハレヌ]
くり。法のいさまりくるや

此段終リノ徳ノ至レリツクニヤ上云処肝要ナリ芋頭ヲ好ム[ヲ]能ニアラス其外世ヲ軽ノ思フ条〻皆人ノ好ム処ニ非ス[ヒ]務ムベキ[ヲ]向ニ達シ徳ノ至レル人ナレバカホド私ニフルマイセヌ寺中ニモ重ノ思ハレ人ニハレサルトク兼好心モ此僧ノ行跡ヲホムルニ非ス徳タニ至レハ外ノコラス世人ユルセルソト云処ヲ記スネ徳ノ者是ヲマヌカレバ則往人ナラン

[廿五]

[疑大ニ]

[ヨノ学]

[ヒル]

[サダ]

[カタヂケ]

[ヒル]

[ヒル]

[ヒル

贈おとゝ 六三ノ十二 腰ノ氣ヲヒストヽ云義ヲ上ル
大原 壐後ノ大股三ヘルトノ義ヲ上ル

たゝをきり

古キ寶藏ト寺社共ニタカラヲ納ル藏ヲ指メ云其繪ニ賤キ人ノ手ヲノ産タルニ此繪アリ然レハ昔下ノ用ニタルヘキヲ改テ本說ナキヲ誤ルヲ改テ此段ヲ書リ但シ此ノ久ニク用ルヲカ平家物語ニ御殿ヨリ贈ヲ落セシヲヲ記セリ

冷泉門院いときなくおはしける時。院の御前にて。

人なとつてとてとさせおはしける時。院の御前にて。

こゝろくらへよりくるものゝ

この歌。ゆゝしくよめるとなり

此院御幼稚ト云姫宮ト云其タ奇妙ノ御歌ナレハ爰ニ記ス但シコヽロクラノ假名イノ字ハ誤リナルヲ兼好記セルヲ難スル人アレ共苦シカラス三中頃阿カナ魚ノ歌ニヨム時鰹ヲ云カケテコヽロトヨメル例モアリ

後七日 眞言院ノ御修法ハ正月八日ニ兩日ニ四日結願ナリ九ノ禁中ニ元日ヨリ白馬節會迄ハ公事多キ故ニ沙門ヲヲヅ八日ヨリ始ル故ニ後七日ト申也天長六年ニ弘法大師大唐ノ内道場ヲウツシテ禁中ニ眞言院ヲ立ラル承和元年ヨリ大師此法ヲ始テ行ハル今ニ於テ東寺ノ長者我本坊ニテ元日ヨリ行ヒ八日ヨリ禁中ニテ執行ハル大師請來ノ袖衣ヲ著ル曩祖開屬ノ五鈷ヲ持テ玉体ニ近付奉リ香水ヲ加持メ灌き奉ルト也

武者をあつむ 甲冑ヲ帶シタル武者西門ヲ警固メ盜賊ヲフセクナリ

ありさねにそ 此御修法ハ天長地久五穀成就ノ爲ニ行ハルヽ上ハ年始メ兵ヲ用ヒヽハ安穩ナラヌ体ソトヽ

五緒 或曰簾ノ飾ノ由ヲ圓傳上ル云ヒモ猶有職ノ人ニ傳受ナクテハ難知

きゝもつゝ住 極官極位ナリ其家相當ノ極官極位ニ至ルヲ垂ルト云ヒヽ菊亭少

後七日晝の阿闍梨。武者を

此御修法ヲヲヅメ阿闍梨ノ師ナリ

あつむる事。いとゝや盜人なほありさねにそ。宿直人

訓ヲ以ハ殿ニ上ル心ヲ禁中ニ夜番ヲスルヲ

もなくおほかり。一年の相ハ池中のありさねにそ。

瑞相ノ詮文ニ根省視也晉言故事文ニ人負ノ日相ト

なれゞつゝものをもいふ。をゝやうなぬきたり

轉ル五緒ノ必人ノ上ノ

右大臣ノ書札ニ攝家ハ以二関白為一先途一
清花ハ以二一上一為先途ト云云先途ト云ハ極
官極位ノ是ヲバステ他家ヲモ可推知

或人云

二條家ノ車ノ記録ニ云
御門ノ大納言ノ枚ニ云ノ大八葉五緒ノ車
長物見ハ極位ノ人是ニ乗ス近代多ク乗用ス
不可然トアリ此ヲ引用ス

式ノ冠モ(ヲ)ヨリ(ヨリ)

とぞ。あるひとのいはく。古代の冠桶(カブラヲケ)をもたる一雙(ソウ)(一番)をそへてぜ
うにもちゐて今利(リ)なし(上ノ段ト此段ト有職ノ事ヲ記スリ)

雲林院(ウンリンイン)の菩提講(ボダイカウ)(五人故トヨラヅ)
家平公ノ大織冠(カンジ)ノ二流(ナガレ)
(日本紀ニ下野ノ国ヨリ奏ス)
(武勝カ辞)

其身(ソノミ)につけてきゐもふつの
(尊卑下人付テ見ヘシ)
さ位よいうぬきへのふ
ものなりとぞ。あるひと
作(ツクリ)もの

冠桶(カブラヲケ)ニ入ル曲物(マゲモノ)ニノチ包(ツツム)ヲ
冠(カブリ)ヲ入ル(イル)ヲ(ヲ)ハ(ハ)ヨロヒ(ヨロヒ)ト云(イフ)
(ヨロヒ

ろぬまて二ホ付へし（鳥ニツヲ校ニ二ホ付ル）花のさかひのうちも狭のうへ。初雪
くもへてきりて。半の角のやうにたゝもへ。（右ノ光ヲ羽アリト大和ノ人ハ雪ニ似タリ）
のあしたに枝をうたけてゝ。中門のふるまひてま
いる。（軒ノ下ノ石）なきりの石をとけそ。雪よ給をつけそ。あま
（掩）
れひのもとをこそふるうちにして二むのの（関白ノ殿ニ有ルヘシ）
（頂戴ノ後有ニカクルヘシ）
（大ナル花ヲ鳥ノ緑ニ出サンニ）
もりの尾付ニホ付花ヲ折ラル毛ノ
和乃（カウ）「ニカキト訓ス梶杆」栴（ヨ）よせく。緑と生そうれハ。肩にうけて。拝
（鼻）
してもりそく。初雪といへ共。番のもふのそれ程
の雪りハまいらす。あまたゝひのもともちらすそ。
有ハよゝこゝとをゝるともあ（是ヨリ兼好カ辞）
（是ヨリ武勝カ辞）
るへしゝ「花よりもつけをとゝ。いふ也へきの

ありなん。長月（ナカツキ）ころよ梅の彼り枝よ雉（キシ）をつけて。

伊勢物語 ツカフマツルヨシ長月バカリニ梅ノツクリ枝ニ雉ヲツケテタテマツル上ノ我タノム君ガタメニトテ折花ハ時モワカヌ物ヂ有ケル 武勝カ花ニ鳥付ヲ知ニハ云ニ依テ兼好不審ノ如此ニ伊勢物語ニ出タルガ但シ是ハ作リ花ヨルニ依テクルシカラスカト

賀茂の岩本（イハモト）梅本（ウメモト）葉平（ハヒラ）実方（サネカタ）なりぬるわ

葉平ハ平城天皇ノ御孫阿保親王ノ五男ナル故在五中将ト云ヘリ 実方ハ近ノ中将近ノボリテ哥人ナリシヲ一条帝ノ御時大納言行成ト口論ノ事ニ依テ陸奥ニ左遷セラレ其後西行下向シテクチモセヌ其ノ名計ヲトヽメ置テ枯野ノスヽキ形見トノミ見ルトヨメリ 此方ハ新古今集ニ入ル 扨岩本橋本ノ神ヲ葉平実方ナリト云ハ非ス此ノ両社ノ両人信仰セシ方共其両社ノ内何ヲ

人の常よいひまぎへ（兼好ト未詳ニテ）侍れハ。一年（ヒトヽセ）ゑりそろ（ヘ）にゝ花

うる宮司のもとをよびとめて歌をおくりしに実方へ
みちのく[みちのく]　御手洗ハ神山ヨリ出テ片岡ノ森ナド過テ流レ行ク　枕御手洗ト云名、加茂ノミニ非ス神前ヲ流ル川ヲ捴テ云トミヘタリ京極ノ御息所ノ歌合
春日ノハスレ古スハミタラヽ川ナカレモタヘシド思フ
吉水和尚[吉水和尚]　慈鎮トリ法性寺ノ関白道公ノ子トリ山門六十二代ノ座主東山吉水ニ居ス故ニ吉水和尚トモ云
おぐらしき人のやさうは。岩なれやとよ。もの思ふらん。
[中ノ人ハ御子上ト云ヘリ]
[共ニ]　[礼義ヲヒテ]
いとうやうくしくひもとゝきて。いふ
[モトノ宮ノ理ヲヒテ西社ノ公ヲヒヨク同ヘヒヘ兼好ノ感[ル]辞]
[悠久スルヽ]
くすしうおもひ[ミツ]の和尚　月をめで花をこの[コノ]ましき人にもあるまじきと。
[載ル]　今おもひ院の[ヲ]

今出川院[今出川院]　亀山院ノ后西園寺公相公女
近衛[近衛]　ヲ湯ノ局トリ大炊御門ノ腹流
大納言伊平ノ女ヽ　井蛙集曰近衛局九戈ノ時ヨリ厚永上云歌ヲヨミ續古今ヨリ以来ノ五代集ニ逢テ歌入リ詩ヲモ作リ佛法ヲモ辨ヘ一生不犯ノ女ヽ

て[タ]おもて[オモ]向ふ[ム]ら[ム]ん。誠[マコト]よやんごとなき人のおはすれば。作文[モンジ]の序[ジョ]もいとゞ
[詩ノ小序ナド]
くく人なり　此段葉平實方ノ岩本橋本ノ社ヲ信セラレヽヲ述テ末ニ近衛局ノヽヲ云テ真實ニ此神ヲ信セラレヽ依テ真ノ誠ヲ感ル故ニ名歌ヒヲ讀出サレヽヲ記ス次ノ段ノ端ヲ起ス

[ヲ]　[非ス]　[ヲ]　[ヲ]
[九九四ヲ捴テ云トリ]　[主人根ヲ]
鏡[カヾミ]よりほか[ホカ]に[ニ]　神[カミ]領使[リヤウシ]もと[ト]。いやしうもあるものの
をけるが。[ヲ]　[ヲ]　[ヲ]　[ヲ]　[ヲ]
朝ごとにこれ[コレ]をみて。年[トシ]久しく[ヒサ]

成ぬ。あつ時舘（タチ）のうちよりけぶりの（屋形ノ）
歟（ケム）をそ（襲）見（ミ）侍（ハベ）りて。ことせあけて。無二人（ヒトナシ）走（ハシ）出（イデ）て。
たそ人 侯（ハベ）襲（ソ）昔（ムカシ）の傳（ツタヘ）曰（イハク）輒（タヤスク）行（ユク）掩（オホフ）其不備（ソナヘザル）又趙（テウ）盾（ジユン）
九師有（アリ）鐘（カネ）破（ワレ）忌（イミ）伐（キル）無（ナシ）一旦（イツタン）襲（ソ）上
然（シカ）ハ敵（テキ）ノ思（オモヒ）ヒカケヌ処（トコロ）ヲダニシテ伐（キル）ヲ襲（ソ）上ニ
云（イヘ）て。曰（イハク）比（コロ）てよ。拍（ウツ）子（シ）とる人（ヒト）ぞと問（トヒ）
食（メ）しつる。土（ツチ）たる（等）らにさるといひてうせにけり。
ふく信（シン）をいふ（弘）ーぬれば。ふく信（シン）ありけるにこそ
此段前段ヲ承テカル無情ノ物ニダニ深ク信ヲ上ハ人ノベカラザラント云ヘヲ記ス
感應 ナキ一ハ人ノベカラザラント云ヘヲ記ス
書写上人 播磨ノ書寫ノ
性空也 歟書曰性空、平安城ノ人

従四位上橘ノ兼根子也空十歳而持法華經三十六出家ス云々至書寫山歎息
而曰性空六根清淨者乎寛弘四年三月
十三日誦法華ノ寂ス年八十

屋（ヤ）の立（タテ）いる（弘）ま（ム）けるに。豆（マメ）
ける音（オト）のつぶくとせ（助語）
のまらしをいふ。うるめーく我をそ煮（ニ）てっくめを
見（ミ）ま（ム）ほしといひけり。たらく豆（マメ）のもくと
鳴（ナル）音（ネ）ぞ。豆（豆ガラノ焼ノ音如此耳ニ入ル）ののしりするこそ
こゝろなけれ。ちくもきくもなりうるこそ
とそ。ぬくけ（ケ）る

此段イヨ〳〵前ノ段ヲ以テ性空ノ法華讀誦ノ功ノ顯ルヽヲ
記メ今ノ人モ信心懈怠ナキ時ハ其験ノアラントヲ教ユ
爰ニ記ス豆ヲ煮ル一世說ニ魏ノ文帝ノ弟曹植ニ七歩ノ詩ヲ作ラセ玉フ時此ノ二似タル辞アリサ
レド共ノイヲ必ス爰ニ引給フ兼好用ヒ非ス偶和漢同シ辞アル迄也

元輔乃清暑堂ニテ遊ヒ侍ケルニ（後醍醐ノ御神ヘ上云フ御遊ナリ）
清上濁ト両点ヲ附ク 琵琶ノ名ニ柿部助自敏渡唐時渡ス処ノ四面ノ故ニ名ヲ得タリ 拾遺ニ云大堂ノ会ノ日五絃ヲ給ヒ此ノ琵琶ヲ賜フ一行ノ作ナリ
亭のたて牧馬とるあしけ（東宮ノ蔵人ノ頃ノ名 同時ニ渡ス処ノ四牧ノ馬ヲ取ル役ヲ勤ム）
毛をうらくしとてうりそへたりけれは（琵琶ノ柱四ツ有リ其ノ内ノ一ツヲ落シタリ 琵琶ハ絃高ク柱ヲ立テヲ善シトス 続古今ニ此ノ柱ヲ馬ノ毛ニ譬ヘタリ）
うるはしくいとをもよりおひさせよといひけるを（琵琶ノ絃ヲ緩ムルヲ善シトス 続古今ニ此ノ絃ヲ馬ノ毛ニ譬ヘタリ）
なとかくひて（東宮ノ蔵人ノ役ヲ勤メタリ）
返事もせんと思ひけるほとに（柱ヲ放テ）
なかうまをきこえなくなりにけれは（此段ハ一切ノ推量ハ外ヨリ違ヒタル事ナリ）
名とりにやとて（誰トハ名ヲ出サヌ事ナリ）
西京にすみ侍ける人のもとに（其ノ名ヲ出テハコノヤウナル顔ヲシテ居ルト思ハルヽナリ）
まかりたりけるに（推量ハ外ヨリ違ヒタル事ナリ）
ひさしくおとなひもせさりけるを（此段ハ一切ノ推量ハ外ヨリ違ヒタル事ナリ）
なとかくはとひたまはぬ（誰トハ名ヲ出サヌ事ナリ）
と申たりけれは（其ノ名ヲ出テハコノヤウナル顔ヲシテ居ルト思ハルヽナリ）
ありけんとたゝ（昔ヨリ我ガ国ニ人モ多ク住ケル事ヲ云ヘリ）
へらるゝかは（推量ハ外ヨリ違ヒタル事ナリ）
今乃名る人の（又ノ名ヲ出サヌ事ナリ）
ものいつそやありしをとゝめすは（昔ヨリ我ガ国ニ人モ多ク住ケル事ヲ云ヘリ）
ふるさとも（昔ヨリ我ガ国ニ人モ多ク住ケル事ヲ云ヘリ）
いやしけなる者（誰トハ名ヲ出サヌ事ナリ）
に筆とられ（用ユ 違ヒ 名無用）
未のたえ（琵琶ノ柱ヲ落シタル事ヲ云ヘリ）
葉とれおりき（琵琶ノ柱ヲ落シタル事ヲ云ヘリ）

ありけんとたゝ（昔ヨリ我ガ国ニ人モ多ク住ケル事ヲ云ヘリ）
へらるゝかは（推量ハ外ヨリ違ヒタル事ナリ）
今乃名る人の（又ノ名ヲ出サヌ事ナリ）
ものいつそやありしをとゝめすは（昔ヨリ我ガ国ニ人モ多ク住ケル事ヲ云ヘリ）
ふるさとも（昔ヨリ我ガ国ニ人モ多ク住ケル事ヲ云ヘリ）
いやしけなる者（誰トハ名ヲ出サヌ事ナリ）
に筆とられ（用ユ 違ヒ 名無用）
未のたえ（琵琶ノ柱ヲ落シタル事ヲ云ヘリ）
葉とれおりき（琵琶ノ柱ヲ落シタル事ヲ云ヘリ）

くてんぐ「うぬゃ。文車丸ノ塵塚ノもり
（書物ヲ入ル車ヲモ文車ト云ヒ今ハ本ニモ）
ぢゃうそうつてみるそ。
（此段世間ノ人兎角偽ノ多キ品ニヨリ云立テ関人ニ真実ヲ悪ヒテ謀ヲセヨヤウニト教ル）
「ぢゃうそうそうなりやあるまい。
（大形虚言ヘ）
よ。海ゐて年月をすごいたもつぢゃぬ。いひさうな事ぢゃ。
（東ノ方ヲ西国ニテハ云ヒ京ノ方ヲ西国ニテハ云ヒ）
ゐもつぢゃぬ。いひさうな事ぢゃ。
（ソノ筋ニ不案内ノ人ノ事ヲ諸芸能ノ上ニ譬ヘ）
人のその通ぢゃ。そもそもいつからの事ぢゃ。
（坐ノ守也ヲモヒナラズ心ノ文選ノ賦ニ坐ニ非ズ善注ヲ敬ヒ南法忽然ヒヒ）
知まい人にさうよ信しもたこさひ。音よりきてとゞろ
時とハ何ぞもかまうものなう。あうもうもうつ
（日ノ暮ヌ内ニ）
ゞ口よ海ゐていひ
（遠也先傳ニ心不則徳ヲ修ニ）
「ぢゃうそうそうなりやあるまい。
（大形虚言ヘ）
よ。海ゐて年月をすごいたもつぢゃぬ。
（東ノ方ヲ西国ニテハ云ヒ京ノ方ヲ西国ニテハ云ヒ）
ゐもつぢゃぬ。いひさうな事ぢゃ。
（ソノ筋ニ不案内ノ人ノ事ヲ諸芸能ノ上ニ譬ヘ）
人のその通ぢゃ。そもそもいつからの事ぢゃ。
（坐ノ守也ヲモヒナラズ心ノ文選ノ賦ニ坐ニ非ズ善注ヲ敬ヒ南法忽然ヒヒ）
知まい人にさうよ信しもたこさひ。音よりきてとゞろ
時とハ何ぞもかまうものなう。あうもうもうつ
（日ノ暮ヌ内ニ）
ゞ口よ海ゐていひ
（遠也先傳ニ心不則徳ヲ修ニ）
「きつねの人ゐ。
（見ヤウヨリ是ヒ）
「きつねの人ゐ。
（見ヤウヨリ是ヒ）
ゐもつぢゃぬ。いひさうな事ぢゃ。
（ソノ筋ニ不案内ノ人ノ虚言ヘ）
ゐもつぢゃぬ。いひさうな事ぢゃ。
（ソノ筋ニ不案内ノ人ノ虚言ヘ）
人のその通ぢゃ。そもそもいつからの事ぢゃ。
（坐ノ守也ヲモヒナラズ心ノ文選ノ賦ニ坐ニ非ズ善注ヲ敬ヒ南法忽然ヒヒ）
知まい人にさうよ信しもたこさひ。音よりきてとゞろ
時とハ何ぞもかまうものなう。あうもうもうつ
（日ノ暮ヌ内ニ）
ゞ口よ海ゐていひ
（遠也先傳ニ心不則徳ヲ修ニ）
「きつねの人ゐ。
（見ヤウヨリ是ヒ）
「きつねの人ゐ。
（見ヤウヨリ是ヒ）
ぬようしてぢうのつ
（ぐくとうヨリ是ヒヲ知ヌ人ノ偽リ）
おそろしくあうせて終ぶ言ハ
（ぐくとうヨリ始中終ヲ一部ノ狂言ニ語リ去ル）
ぬようしてぢうのつ
（ぐくとうヨリ是ヒヲ知ヌ人ノ偽リ）
おそろしくあうせて終ぶ言ハ
（ぐくとうヨリ始中終ヲ一部ノ狂言ニ語リ去ル）
ゐもつぢゃぬ。いひさうな事ぢゃ。
（ソノ筋ニ不案内ノ人ノ虚言ヘ）
ゐもつぢゃぬ。いひさうな事ぢゃ。
（ソノ筋ニ不案内ノ人ノ虚言ヘ）
人のその通ぢゃ。そもそもいつからの事ぢゃ。
（坐ノ守也ヲモヒナラズ心ノ文選ノ賦ニ坐ニ非ズ善注ヲ敬ヒ南法忽然ヒヒ）
知まい人にさうよ信しもたこさひ。音よりきてとゞろ
時とハ何ぞもかまうものなう。あうもうもうつ
（日ノ暮ヌ内ニ）
ゞ口よ海ゐていひ
（遠也先傳ニ心不則徳ヲ修ニ）
「きつねの人ゐ。
（見ヤウヨリ是ヒ）
「きつねの人ゐ。
（見ヤウヨリ是ヒ）
ぬようしてぢうのつ
（ぐくとうヨリ是ヒヲ知ヌ人ノ偽リ）
おそろしくあうせて終ぶ言ハ
（ぐくとうヨリ始中終ヲ一部ノ狂言ニ語リ去ル）
ぬようしてぢうのつ
（ぐくとうヨリ是ヒヲ知ヌ人ノ偽リ）
おそろしくあうせて終ぶ言ハ
（ぐくとうヨリ始中終ヲ一部ノ狂言ニ語リ去ル）
「向ノ人ハ何ヒヲ語ヒ心中ヨリ作リ出ス虚言ニ非ズ
「向ノ人ハ何ヒヲ語ヒ心中ヨリ作リ出ス虚言ニ非ズ
「向ノ人ハ何ヒヲ語ヒ心中ヨリ作リ出ス虚言ニ非ズ
ゐ。鼻のなどをごあ
（鬼ハ偽ヒヲ思フヲ顔ニアラハシテ云ヒ）
「物ヒヒセヌ体ニ読ム中ニ咲ヒヲ含ミテ云ヒ）
（春藤ノ守）
ろくうもれそめきぐ
（是ヨリ又一遍ノ狂言）
ぬようしてぢうのつ
（ぐくとうヨリ是ヒヲ知ヌ人ノ偽リ）
おそろしくあうせて終ぶ言ハ
（ぐくとうヨリ始中終ヲ一部ノ狂言ニ語リ去ル）
ゐもつぢゃぬ。いひさうな事ぢゃ。
（ソノ筋ニ不案内ノ人ノ虚言ヘ）
ゐもつぢゃぬ。いひさうな事ぢゃ。
（ソノ筋ニ不案内ノ人ノ虚言ヘ）
人のその通ぢゃ。そもそもいつからの事ぢゃ。
（坐ノ守也ヲモヒナラズ心ノ文選ノ賦ニ坐ニ非ズ善注ヲ敬ヒ南法忽然ヒヒ）
知まい人にさうよ信しもたこさひ。音よりきてとゞろ
時とハ何ぞもかまうものなう。あうもうもうつ
（日ノ暮ヌ内ニ）
ゞ口よ海ゐていひ
（遠也先傳ニ心不則徳ヲ修ニ）
「きつねの人ゐ。
（見ヤウヨリ是ヒ）
「きつねの人ゐ。
（見ヤウヨリ是ヒ）
ぬようしてぢうのつ
（ぐくとうヨリ是ヒヲ知ヌ人ノ偽リ）
おそろしくあうせて終ぶ言ハ
（ぐくとうヨリ始中終ヲ一部ノ狂言ニ語リ去ル）
ぬようしてぢうのつ
（ぐくとうヨリ是ヒヲ知ヌ人ノ偽リ）
おそろしくあうせて終ぶ言ハ
（ぐくとうヨリ始中終ヲ一部ノ狂言ニ語リ去ル）
「向ノ人ハ何ヒヲ語ヒ心中ヨリ作リ出ス虚言ニ非ズ
「向ノ人ハ何ヒヲ語ヒ心中ヨリ作リ出ス虚言ニ非ズ
「向ノ人ハ何ヒヲ語ヒ心中ヨリ作リ出ス虚言ニ非ズ
ゐ。鼻のなどをごあ
（鬼ハ偽ヒヲ思フヲ顔ニアラハシテ云ヒ）
「物ヒヒセヌ体ニ読ム中ニ咲ヒヲ含ミテ云ヒ）
（春藤ノ守）
ろくうもれそめきぐ
（是ヨリ又一遍ノ狂言）
そろそろ云ハ人いてあらばこ
（向ノ人ノ虚言ニ何ノ我為ノ面目ヲヤラニ語ヒ此物悪虚言ヒヲ）
時人の鼻ずる虚言をべひ
（此ニ我獨リ是非シ虚言ヒヲ云アラハサンモ途ヒテ同ジ）
そんも途なくてきていひ
（是ヨリ前ノ段ニヲ結ノ後ハ前ヲ以テモヒヲ諫ノ別ニ）
てゐいとごさ海りぬべし。
（何ニヲ図テモアリ信ヲヲコヒ）
世なりそでつまよあるめづ

ふんごん方たぐひべうもあらず。下ざまの人の耳にたどろくことのみありて。よのまことの人はあやしみ給ふべきにもあらず。されば世俗の虚言を会ふも信ずるもあるべきにもあらず。せんなけれども。大ようはなほうしろめたくあひしらひて。ひとへに信ぜぬやうにあざけるべきにもあらず。

此段ノ末ニ尤偽アル世上ニ於テ仏神三宝ノ奇特ヲ権化ノ人ノ傳記ニ又種々ノ奇妙ヲ書ケリ是迄ヲ是モ亦偽リナルベシト疑フベカラズト云リ。さるべき因縁ノ有ルニヨリテ権化ノ人ノ徳ヲホメンガ為ニ記ス。故モアルベケレバ是ヲモ取上信ズベキ事ナリ

銭のこと。「世間三人ノ多キ体ヲ銭ニ喩ヘ」又栴子厚ガ銭ノ論ニ同シ

なくてしもあり。「君臣ノ身ヨリ上貴賤ノ人ニ至ル迄銭ヲ愛セザル者ナシ」

あり。「貴賤皆銭ニ従フ意」

あり。夕べありて朝をもあひしらひ。「貴賤皆銭ニ従フ意」

ぞや。「生ヲ貪リ利ヲ求ルノ人貪ヲ指ス」

「歳ナリトモ長命ナルハ一ノ人貪ヲ指ス」

ぶやと向テ下ニ解ス

しもさかり利をとりとめてやむ時もなし。「是ヨリ生ヲ貪リ利ヲ求ルノ人ノ貪ノ喜ビ尤ナリヲ云」

あり。「老ト死トノ二ツ」

「貴賤トモニ老果ハ死ヌルガ二ツ」

「早速ナリ」

ぱら。「念ノ入ル間暫時」

をまつ間。「老死ノ人ハ水流ノ如ク日月ニ従テ行」

「利欲ニ愛ノ如ク世人ハ」

それぞ名利よ。「老死ノ行先ノ途ノ」

ほよいなり。「又愚癡ナル者ハ」

らんことを思ひて。「老死」

化ノ漸ニテ若キ者老ニ至ルガ如ク。化ハ変ノ成テ其形ヲ同ジク世ズ有ル物ノ忽チナクナルガ如ク死スルハ化リ

凡ノ天地ノ間ノ万物一ツトシテ変化せズ止ムコトナシ四時ノウツリ日月ノ昼夜ヲナシ草木ノ日ヲ出デ日ヲ入ルヘ

皆変化ナリ 迄ハ人モ天地ノ間ニ変化ノ出生ニ名ル者ナレバ又変化シテ或ハ老ト或ハ死スルナリ愚キ人ハ是ヲナゲキテ老モセズ死ニモセズヨ常ナラシテヲ願フハ根元変化ノ人ナルヲ知ラヌ故ゾトシ 此段ハ名利ニ溺テ道ヲ忘レル人ヲ戒ム

前段ノ餘意ヲ云ヘリ

つまらぬ人にいつもかんちがひ。まのきゝ方ちがひ

心ニ思ハスト云テ其人ハナリ

世間ノ煩ハシキヲ離テ徒然トノ

こゝろぐ ひとりあるのこそよけれ。世にまじはれば心外の

本心ヲ外ノ名ガラハシキニ奪ヒ

ちりにうづもれて ほぞをかむ 利欲ニ

我思フマヽニ不ル言ハ人ノ耳ニモサカハシカト

よそのまゝに おもしろげもなくて。人はよろこぶ。

是皆世ワタバナラヒ

たゞまめ。掛ものあるこそ。一ト冬

ナゲキ恨悦ニ不定ニ皆世間ニシタガフ故ニ

云事定まりもなきものを。分別ばかりはたゝりて。

分ニ

ほぞの失やむ時もなし。まどひのうへをかさぬ。酔の中よ

或ハ利ヲ得或ハ利ヲ失ヒ

り 狂ものこそいそがしけれ。

是名ハ本心ニヨヒテ定ニラヌヲヲ云

心ノクルハシキ体ニ文選 恍々ヲホルニヨメリ

信ノ道ヲ

こゝろ多き人これをまどはす。いまゞ誠の友を志ざし

縁

もとめ。えんをもとめて 世間ノ諸縁ヲ離レ

ヒマヲ徒然ヲ宅ヒ

こゝろを閑にして。事を 世事ヲ

ボウ

おこらず。

西行カ云ヒシハ人ヲ捨ハ心ヲ捨ヨト云ヒシヲ聞テ月ハ二ツ有ル物ト云ヒシ心ト同

天台六十巻ヨリ

ひつべくそれ。生活 人事ヲ 技能 万ノ芸能ヨリ 学問 内外ノ書ヲ学ブニカヤウノモ本心ヲ失リヨリ

摩訶 ハ梵語ニテ大ト飜ス 止観 天台大師ノ作ル処法華ヲ観ル書也 玄義 文句 止観是ヲ三大部トヲヌ

時ノ権柄ヲ云人或ハ威勢アリ 敏達ノ人ヲ

世のわたくさ なるあるべし。

武ハ仮名ヲ入ヌ古ノ

昨日もありて人たり。

案内ヲ云入テ其間ニヲヲ

明日もまたかくのごとくあるべしと。いひ入てそむ

サヤウニテ叶ヌ事アリトモヨリ

るべき事もなほ心にかゝりて。

法師ハ人ようとくして

ありなん　此段モ前段ヲ承テ云ヘリ前ニ捴ノ世間ニ交ルヲ厭ヒ諸縁ヲ放下セヨト云ヒシ則チ法師ノ世ニ交ルヲ戒ム

老中（お）段ノ餘ヲ云

老中よりさきに人のもてあつかひぐさにいひあへる事ぃ（樟事）

うふべきにあらぬ人のよく薬附（又知ル呼ベ知リ名人ニ念比ニ向フ）

きうせんとし侍（承引ト難）

聖（ヒジリ）法師ともぞ（世ヲ人ノ上ノ沙汰ヲ我身ニ善悪ヲハ自ラハ知ラヂヲ子ハ是ハ世間ノ）

（ハカグ〳〵シカリ）そうろうへきりけんと（文勢ノ表裏ヲ云ヘリ）

今やうの（當世ハヤヲ云言葉ナリ又新樣ト時樣ト雖トキヲヲ云ヘヤウスカタヲヨヤウト云ヒ物カト云説モアリ）

ものゝめ（ヒトヲ我テ又ヒ）

ひとをみうけ（ミツカラモ）

うるさ。世よ（旧）

うつゝの人（世ヲ）

などのある時（何ノ時ト雖モ去モテアラス）

ともにいひつけ（祖テ逢名人ナト云ヒ）

うるさ。祖（種）の名（其ノハヤリ言葉ヲ心内名ト云ヒ）

などいふ（共ノ字ナノ物ヲ三ツ四ツ云テ其下ニ今日スル上ニ云ヒ）

世（よ）ひろひ（ろ）どして。（是ハ何事ヲ云ヒシ）

世（世間ニヒビ）もれむ。（ぞ）ようゝぬ人のもとを（其道ハ立入ヒ無案内ノ体ヘ）

（ハヤリ言葉ヲ云ヒシ）

何（なに）のもの入（い）ぬ海（う）もあるぞ（ハヤリ言葉ヲ云ヒシ）

とてさのこゝろ（ハヤリ言葉ヲ云ヒシ）

人（ひと）そ（ぞ）方（かた）（ナカ）

まハ世（世間ニ）（「世ノ中ニ諸藝能ヨク長ヂタル人ハ我為ニハ恥ニ非ス方ヒト田舎人ニ知ニ及ヌ人モアリ」）

思（おも）ふ（ふ）事（こと）（ぞ）（「自ラコソヨク知リヒトヲ自慢ノ顔ナハ」）

（宋文公敬ノ箴ニ常ニ如瓶ヨリ）

（「疎ニヲ好ムヨリ段ヽ下ニ云」）

人（ひと）毎（ごと）に我（わ）（モ）

兼好時代大塔宮兵部卿親王ト云ヒシ天台座主ニ三井寺ニヒタヽ有ヒヲ「戦ノ好ミモノ其外山門三井寺ニヒタヽ有ヒヲ」

（「段モ前ノ余論ノ云ヒシ」）

連歌し。管絃をたしなむなどもあるべし。されどそれもまことの
まつりごとより。もる我人よりにもあるべき上達部殿上人
こそおのづからなり。而して我が国の名を定むること。甚だ故ハ軍
勇者よりおこるといふ人なれば。
つゐに敢よりて。死をやすくして海内を治めて名を
あらしめんなどハ武よりおこるべきなり。いはんや
人倫よりおこるべきをや。禽獣よりおこるべきをや。
人倫よりおこるべきハ。天の生気を受て本心具
足の仁あり。万物を害ふハ本人倫の好ム処にあらず
て益なきなり

禽獣 「キンジウ」 鳥類ハ仁ノ受ケ易キ方ヲ害シ生物ノ食テモ心ニ憶ヒ出サレ
近キフルニ
其家よあらん 世尾武士ノ家ニ生レテハ其ノ道ヲ好ミ武勇ノ励ハ且テ益トナルベシ
ラハ人ノ戦ヲ好ミ武勇ノ励ハ且テ益トナルベシ
屏風障子 「ビヤウブ」 「シヤウジ」 下学集ニ屏ハ退也退ノ風ノ義也
又屏ハ蔽也蔽ノ風ノ也是モ通
此段モ前段ノ意ヲ論
利害のあるのほどをよく見ゆるなり大きなる
綱度そもそもをとりて世のまつりごとのよきあしきを
ただしてもありぬべし。さて。用ある事ども
をとりそろへてきやうそくといふなり。

しるべ。法のへもちて。「道具イヤウズ」
此段上ニ家居ニヨソヒガヤハヌシハカラルニト云ニ段ト同意ニ見ユ」
羅也錦ナドニテタル类物ノ表紙ナリ
うちもの表帙（ツヽミ）へ。らく掲（ソヘ）
ひーに。虻（アブ）ひのがうをも掲へうそ
軸の 小野ノ宮大納言能實後鳥也五歳ニテ殿山ニテ修学シ其後高野語テ名ノ頻聞ト成ニ条ノ為世ノ門第ニテカクレナキ奇人ナリ
らくん軸 螺鈿也紫檀ノ軸ニ貝ヲリ入名ナリ
弘勲 擯出僧都也建武比伊賀ノ佛性寺居住
ふちどの同（ドウ）やうにもあるぬと兄（アニ）みてといへど。弘勲僧都が。掲給ふるに一見（イチケン）具（グ）よくのうんとするぞ。楷書（ソヽキヨ）のとうりもふ具（グ）なるてそれといひしもいとく

たがくしちりをべて。「是ヨリ弘勲ノ詞ノ受テ十分ニ悪ニトノ云ヒヲ残ス」
事也。きのつくるをさして。其（ソノ）つくりをいふ。息（ソク）廷（テイ）ニ云（イフ）ニ云（イフ）トカケルカゝる
きのつくるもぐちり。閻裏（ダイリ）造（ヅクリ）ニても。必（カナラズ）つくりまてぬ物のことなりと或人の也。先賢（センケン）の
つくれる閻外（ダイガイ）の文（フミ）にも。章段（シヤウダン）のつけてあるこそ筆
内外 儒書ヲ外佛ニ云佛書ヲ内佛ニ云ク
章段 天台止観ヲ三段カケ毛詩ヲ六芸備ヘ大学ノ格物ノ伝ノカケタル類ナリ○此段モ
ヌ。頓（ヤガ）テ為（ナス）ニ成（ナル）ヲ見（ミ）テ品（ホン）ヲ見（ミ）ルニモサマ三ニ
スト云ヨリ受ケテ云ヒタル者ク
竹林院 公衡公ナリ○此段モ上ノ段ノ十分ニ調リタル悪キ上ニヨリ猶ヲ餘リヲ論ヘ
一上 職原抄ニ左大臣一人相當正從二位官ニ良統領之ヲ故云ニ上ニ

そやそちんとて。書家（ショケ）志（ココロザシ）ひよそう。「竹林院心ニアカレハキ人ノテガハ
生（ナマ）やうしげちう。「上（イチカミ）
大（ダイ）ニ成（ナル）ね。「上（カミ）」

洞院 左大臣 洞院ノ実雄公也 従一位左大臣ニ叙ス

[朴国] 太政大臣 唐名ナリ

[甘心] 甘心ニ下ハ其食ノ口甘ニ応ズルト云ニ我心ヲ下ニ応ズルト満足セシムル也

[九龍] 易乾ノ卦上九ノ元龍有悔易ノ心ハ元龍ハ天上ヘノボリ極リタル龍ナリノボリ極リテハ心降ル可キヨリ外ナシ故ニ必ス後悔アルベシ

[月満] 釈名ニ月ハ缺也満ツレハ則缺ル 古ノ言ニ

思ヘ唯三王ハヤガテ缺月ノ如ク空キ人ノ世中

[満那三蔵] 高僧伝ニ出ル三法蘭姓ハ竺氏平陽武陽ノ人ナリ普安帝時渡来シテ広ク経律論ノ三ヲヲサメ得タル人ヲ云

乃天竺ニ至ルマデノ人々ノ経律論ノ三ヲヲサメ得タル人ヲ云

ちゝひ。病よりてハ。漢の食をねこひ給ふことを

此ハ支法蘭珠林ニ出タリ

ものて。さてそかくれ人の。喜ひ給ふ人のいひしを

[廉頗] 史記ニ出ル趙ノ将軍ノ名ナリ

[藺相如] 同ク趙ノ将軍ノ名ナリ

[弘融僧都] 弘融ハ空海ノ弟子ニテ東寺ノ別当ヲ勤メタル人ナリ

[優婆塞] 在家ノ男ノ仏法ヲ信ズル者ヲ云フ

[優婆夷] 在家ノ女ノ仏法ヲ信ズル者ヲ云フ

[比丘尼] 出家ノ女ノ仏法ヲ信ズル者ヲ云フ

[沙門] 世ヲ捨テ人倫ヲ離レタル者ヲ云フ道情

[婆羅門] 此ハ梵語ニテ清浄ト云フ意ナリ

[刹利] 此ハ梵語ニテ田主ト云フ意ナリ

[毘舎] 此ハ梵語ニテ商人ト云フ意ナリ

[首陀] 此ハ梵語ニテ農人ト云フ意ナリ

[旃陀羅] 此ハ梵語ニテ屠者ト云フ意ナリ

[四姓] 婆羅門刹利毘舎首陀ノ四姓ヲ云フ

[五逆] 父ヲ殺シ母ヲ殺シ阿羅漢ヲ殺シ仏ノ身ニ血ヲ出シ和合僧ヲ破スルヲ云フ

[十悪] 殺生偸盗邪淫妄語両舌悪口綺語貪欲瞋恚邪見ヲ云フ

[三毒] 貪瞋痴ヲ云フ

[三界] 欲界色界無色界ヲ云フ

[六道] 地獄餓鬼畜生修羅人間天上ヲ云フ

[四生] 胎生卵生湿生化生ヲ云フ

[三乗] 声聞縁覚菩薩ヲ云フ

[三学] 戒定慧ヲ云フ

[三宝] 仏法僧ヲ云フ

[三法印] 諸行無常諸法無我涅槃寂静ヲ云フ

[三世] 過去現在未来ヲ云フ

[三昧] 正受ヲ云フ

[三聚浄戒] 摂律儀戒摂善法戒饒益有情戒ヲ云フ

[三帰] 帰仏帰法帰僧ヲ云フ

[三徳] 智断恩ヲ云フ

[三途] 地獄餓鬼畜生ヲ云フ

[三災] 火災水災風災ヲ云フ

[三障] 煩悩障業障報障ヲ云フ

[三毒] 貪瞋痴ヲ云フ

[三悪] 地獄餓鬼畜生ヲ云フ

[三悪道] 地獄餓鬼畜生ヲ云フ

[三悪趣] 地獄餓鬼畜生ヲ云フ

[三悪業] 身口意ノ悪業ヲ云フ

[三悪人] 殺生偸盗邪淫ヲ云フ

[三悪友] 悪口両舌妄語ヲ云フ

[三悪行] 貪瞋痴ヲ云フ

[三悪心] 貪瞋痴ヲ云フ

[三悪念] 貪瞋痴ヲ云フ

[三悪思] 貪瞋痴ヲ云フ

[三悪覚] 貪瞋痴ヲ云フ

[三悪想] 貪瞋痴ヲ云フ

[三悪観] 貪瞋痴ヲ云フ

[三悪見] 貪瞋痴ヲ云フ

[三悪聞] 貪瞋痴ヲ云フ

[三悪知] 貪瞋痴ヲ云フ

[三悪識] 貪瞋痴ヲ云フ

[三悪行] 貪瞋痴ヲ云フ

[三悪業] 身口意ノ悪業ヲ云フ

[三悪人] 殺生偸盗邪淫ヲ云フ

[三悪友] 悪口両舌妄語ヲ云フ

[三悪道] 地獄餓鬼畜生ヲ云フ

[三悪趣] 地獄餓鬼畜生

下愚性　論語陽貨「上智と下愚とは不移」
至極の愚ナル人　賢き朝に依て教えを其染り
名悪性の事処にウヅル上云て安き　気質性を
是よりイツハリ上云へ正則善を偽ハ実人生
禅話「狂人走不狂人も走」
べくもなく狂人のまねをして大強をもちらん。見狂人
悪人のまねをして人をころさん。
楊子法言「臧獲馬牛皮衣而処者学之」
臧獲を学ぶ
「羽毛孟子曰鶏鳴而起」
かゝる業の人をまねぶ
此段々上ニヨリ賢キ人ヲ見テヒトカラントヲ願ヘ
賢をまなぶべしとの事ヲ上ノ愚キルニヲ教

惟継　平氏西ノ洞院婿流也　皆應五年出家
法名寂俊
園伊　康永二年卒七十八歳
伊平大納言ノ孫

与法師　山ト井ノ叡山より寺よりハ三井寺より
文保元年山門ヨリ三井寺ヲ
焼ケリ
兵仗濁乱と。図右して法師
惟継中納言ハ風月すゝり
満奇ノ事アルヲ云
ものゝ人ハ一生精進して
富ミ栄ヘアルヲ云
富貴自在長ヲ云家富財多ヲ云
縦逸うちして。ち法師は
是ヨリ惟継ノ物語
文保は三井寺やれ

一向妙なるあひて。沙門をあひもちゐれバ今よりハ
寺ハもちゐれ今よりハ
いそぎ秀句なりくり
此段モ弁ノ学ズ弁ノ徒ト云ヨリ承テ惟継ノ俗ナガラ
一生精進三ヲ讀純ニ五ハ實ノ沙門ナリヲ云
秀逸句上云ノ
まハもちゐれ法師　此心ハ日比因伊僧正ヲ
破シ為ニ法師ト与ノ上云ヘリ又法師上云下心ハ大憂ノ心ナリ云ヘリ
ト云ヘリ
弥よ酒のますることなり。字治の住
風流ナル僧ナリ
ゐるおのこ。京より具足坊と
とて。ちまめきたる通世の儀
とこゝろうとちりれバ。学よりもつひくり。あると
腹ヘリ遍ク
記述よるをつのりうそ
つまれおのこよ先「どせ
本手用ル特盃一ヲ入二ヲ入ル入ヲ入ル入ヲ入ヲ入ヲ

志ぎもれべ。物もくそて。召具して行うだに未懐
のうどそて。奈良法師の兵士あまた具してありける。
此男こちむひ。日暮よりうり山中まであゆきぞ。と海里
具足ばかり上ラヨトヘ又向ノ人ニ云ヒ
ひへといひて。太刀をひきぬきかれつ人むかれ太刀ねき。矢
をげちどーけると。具足房をとりて。うつくちく
砕うものの。まげてゆきーうんといひかれつをあく
砕りてるぬ。此男。具足房よあひて。口をきまる
志ひつるものふ。とのまを名ひるる仕うび。宮名仕うん
うするを。ねける太刀むちうくなりあひつるすという
てひきりまりわとうり山ざちありとのまう

密まべ黒人たうて出あへべぶれてそ山ざちとひて
きまうまうてきりけるを。あまうそて出たはせ
おかせて。志ぐうり。馬ハ血つまて。宇治大路の家ま
しまう入うり。浅河うて。わのこ井あまるちうこと
れば。具足房ハちうなちうをりちめ
いぶうて。きりてまちう。うきまで。強まり投
ぜうまて。うきまにたうり此段頃ハ尤人心ノ散乱ル者ナレハ其ノ量ラン
或者一此段愚癡ナル者ハスベキ事ナラ云

和漢朗詠 四条大納言公任ノ撰ス処ナリ
朗ハホガラカトヨム詠ハ吟詠上ノ如ク付テ云タル也
日本漢ノ詩ヲ載スルニ依テ和漢朗詠集
号ス又和漢ハ詩哥ノ二ツヲ指テ云リ此集ヲ
撰ブ二条関白教通公ヲ聟ニセラレシ時聲引出

物ニ出サレタル由世ニ云傳フルヘク

時代やたび 公任ハ一条院ノ御宇康保三年ニ生レ万寿三年ニ入道時ニ六十一才 道風ハ村上天皇康保三年十一月ニ五十一才ニテ六位ノ蔵人ニ補セラレ三代ノ聖賢上ニ仕ヘ又王愚ノ心ヲモ照シ給ヒシ程ニ去ノ年也後ノ人ノ朗詠ノ始メ道風ヲ一時代ト云ヘル事也 或人ノ不審也

（是ヨリ持主ノ事也）さるへくて世よありぐるくく秘蔵（ヒサウ）にしけり 物ノ理非ヲワキマヘヌ童ノ教ヲ施（ホドコ）サンヤー

猫まり 和名抄ニ青猫 赤毛馬 金花猫 黄毛猫ヲリ仕テ婦女ノヲカシテ煩ヲヌ云ヘル 續耳談ニ月令廣義ニ云ヘル

興山ニ猫（ネコ）まりといふものあり

て。人をくらふと人のいひつたへにしも猫のへありて。猫こまりて。人とることにありける。猫（ネコ）のへありて。猫こまりて。人とることにありける。猫（ネコ）のへありて。猫こまりて。人とることにありける。猫（ネコ）

ど懐(ふところ)より取(とり)けるも。水(みづ)よりぬ。希有(けう)のことなりと。(副(そへ)たる文(ふみ)なく)あきれて。家(いへ)へ入(いり)ぬ。(ニ)ひる犬(いぬ)のくるれど。

(ホ)をとりてやらでぞありける

此段(このだん)を世上(せじやう)に奇怪(きくわい)な化物(ばけもの)ばなし又(また)物自慢(ものじまん)ばかり常(つね)にいふ恐(おそ)ろしき化物(ばけもの)ばなしと心得(こころえ)ぬ也(なり)と云(いふ)ふ教(おしへ)

大納言法印(だいなごんほういん)(ハ)(出家者(しゆつけしや)の名(な)上(うへ)に付(つく)大納言(だいなごん)の法印(ほういん)と云(いふ)ことあり僧(そう)の君名(きみな)の付(つく)實平法皇(さねひらほうわう)(ニ)の如(ごと)し)

ものをとりて常(つね)よりゆきつゝ(ヘ)(ト)(チ)

ふと。法(ほう)の(リ)いぢくへゆきつゝ(ヌ)(ル)(ヲ)(ワ)(カ)(ヨ)(タ)(レ)(ソ)(ツ)(ネ)(ナ)(ラ)(ム)(ウ)(ノ)(オ)(ク)(ヤ)(マ)(ケ)(フ)(コ)(エ)(テ)(ア)(サ)(キ)(ユ)(メ)(ミ)(シ)(ヒ)(モ)(セ)(ス)

(ン)

(ゐ)(ゑ)

(ゝ)

(ゞ)

(゜)

(ー)

(「)

(」)

(、)

(。)

(・)

(゛

竽渡場のごとし。ありとある物一トして常住ニアルソリカハラヌトイフナレ

無常変易　天地ヲ始メ一乾坤ニアラユル処ノ

【幻化】幻化ノ二字仏書ニタクサン出ツ万物空ニ吉人間ノアダナル世ナレハ何ヲカ住トテ常ナルゾトイフ

朝ニ心又タニ賢リ老キ時ノ心老ノ後マタ心リ

人の心不定なり。物々変化する。此理をよくさとりぬれば

方物又易ノ名理ヲ知ラン人ハ後ヲ且ク

吉日よき悪日とてなきにあらず。ふよ必吉ことのり。吉凶ハ人による

此段ニ見ヤウ在ルベシ世人行跡ヲ厉ズニ人ノ向日ニ任セテノ執行ス故ニ其ノ愚ナル心ヲ破ラカ為ニ云ヘリ實ニ吉日悪日ナキニアラズ或ハ孤虚王相ノ吉凶ヲ急ル故ニ卜筮ニヨリ筮ニヨリテ大凶ニ起ル或ハ年月時日ヲ考テ本卦ノ吉凶ヲトテ日用ノ行ヲ敬ム然ハ此段必ノ辞ニ泥テ多忌ノ

【二十】

吉凶ともに人より発る。されば人を射ることをよくして的よりもの矢をもとむるものなり。

【手挟】

戎人弓射ることをよくす。

段万人道ヲ修スルヲ急ル故ニ弓箭ニ巧ニシテ人ヲ

的よりもの矢。的のいそく。初心の人

【遊仙窟】平生トヨリ学ビ心ノ念ヒ又等閑ヨリナヤリ出ントスル心ヲ

のうつくしきをもとめ、的よりもの矢をもとめ、

【ゑを】朱文公勧学文ニ勿謂今日不学而有来日勿謂今年不学而有来年月日逝矣歳不我延嗚呼老ノ矣是誰之愆ノ意アスアリトヨヤ心カサテアスノツカ哉

あらんことをねがひて、いそんや一利那の中をもいそんや。なんぞ今の一念発スル処ニ於テ其ニ修セヨ！

をもちゐんや。なんぞ今の一念発スル処ニ於テ其ニ修セヨ！

もの乃甚だうとし。

イカニシテモアダ疎行ノヨリ難ハトカメ名辞ク

牛を賣もの有り。買人「牛ノ主ニ物ヲ
「此段人欲ニ溺シ自己ノ樂ヲ忘レタツガハシク利ヲ貪ル者ヲ戒ム
をとらんといふ。我のまゝに牛死めかゝんと「我ノ思ヒ通リ
約束ヲコレ我ノ思ヒ通リ
ありうらんとする人よ損あらと侫る人あり。兎
まてうへなるものうそ。牛の足。ゆくに損ふ
「後ノ字ヲ側ノ字ヲ用ユ後ハ兼好ヨリ
いへり。まこと大欲ありきことをねがふ。牛既よき「牛ノ美ナル事
ヨボキ
なり。人又れ「牛ノ死ヌル事ヲ不定ノ上ヨリ
うらふる牛ハ死ぬとそうらふ。一日の命。
うらふる「カ」ト同ク不定ノ上ヨリ偶存命ノ上ニ
万金もちもれり。牛のあるひ鵝毛もうそ一万
「万金ノ金ニクラブレバ
鵝毛「司馬遷ニ仕少卿ニ書ニ曰人固有一死
或ハ重キ太山ノ或ハ輕キ鵝毛ニ喩ヘ似ノ鵝毛ニ飛散乱
金をゆて一銭を失人。損あ
つらといふべうそ。ゆく人「朝」て。其理ハ牛のうれ
其ノ人ハ誰モ存命ナレバ必ス牛ノ主ヨリハカラヒ上ニ
ふべうそ。みいくされば人死をまくまんべ。生
「右ノ人ヲ兼好ヨリ
をまつべ。存命の悦日ごとに楽ざんやをろもる人。
「楽」ヲ「ツ」ヲ「テ」ヲ「ル」ヲ「ト」ヲ「ル」ヲ順ヲ「ド」リ
「人間生ノ楽ハ日々命アルニヨツテ者ナレ
をまれて。あやうく。他の財「金銀米銭ノ
なし。いけう間生をまつまで。死よのぞて死と
「志」ヲ「ツ」ヲ「シ」ヲ「テ」ヲ「大百望ニ百ノ上ニ万ヲモ
「右ノ人ヲ兼好ヨリ
おれべ。「東方金ヲ「重キ上ニ云ヒナガラ生ノ楽ニ比スレバ
死ヨリ恐レ「牛」ヲ「主」ヲ「カギズ」ヲ「タレモ同ト云ヒナガラ生ノ楽ニ比スレバ
い。死をれそれざる少なり。死をれそれざる少なり。
死のちれてをつをそ。「是ヨリ一変スル説ニ若又我不生不滅ナレバ
らぞといそで。ゆくの理をゆるとのべーといふ。
「其ノ人ハ此理ヲ云ヒ不定ノ上ニ
「老子ニ下士ハ聞テ道ノ笑ト云ヒ同シ
「華ノ人
人いよくあざけり。

徒然草諺解巻二